

ブックレビュー

# 育児から構築される「母」そして「女性」

—オムニア・シャクリー「教育を受けた母、構造化された遊び」(1998)—

## Constructing 'Mother' and 'Women' Through the Discussion of Child-Rearing

El Shakry, Omnia. *Schooled Mothers and Structured Play: Child-Rearing in Turn of the Century Egypt*

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 鳥山 純子

国家という文脈において、育児は「生産的な国民を育てること」という目的から構築され、女性はその役割を適切に担うことを主目的として構築された。「教育を受けた母、構造化された遊び——一九世紀末から二〇世紀初頭のエジプトにおける育児——」(『「女性をつくりなおす」という思考』後藤絵美、竹村和朗、千代崎未央、鳥山純子、宮原麻子訳、明石書店、2008年、原著1998年)において、近代エジプトを主な対象とする歴史家オムニア・シャクリーは、バーバ、チャクラバルティ、チャタジー、アサドラによるポストコロニアル理論の著作を援用し、19世紀から20世紀にまたがる数十年間にエジプトに流布した教育に関する多大な資料を詳細に分析する。そこで彼女が明らかにするのは、育児と植民地主義やナショナリズムとの密接な関係である。

シャクリーが対象とするのは、エジプトが国民国家として植民地主義からの独立を模索する19世紀末から20世紀初頭という時代である。シャクリーによればその当時を生きたエジプト人ナショナリストにとっての最大の関心事とはエジプトを国民国家として西欧諸国に認めさせることにあった。そのためには植民地主義が依拠する、植民地の後進性を払拭し、エジプト人が独立国家の国民として西欧諸国の国民と対等に近代世界に参入できることを証明することが必要であった。こうした議論において、しばしば「女性」が引き合いにだされることに注意を促しながら、シャクリーはそこで女性には両義的な二つの役割が付与されたと主張する。

シャクリーが指摘する一つ目の役割とは、後進性・先進性の指標としての女性のあり方である。植民地的言説では、帝国の優位性と繁栄を担保するものとして、教育を通じて生産的な帝国国民を育て上げることが帝国の急務とされた。優生学や衛生といった概念を駆使して、育児はそこで科学的に語られうるものとされたのであるが、そこでは「正しい母のあり方」という議論を通じて、帝国の領域を内外に定義することもまた意図されていた。外の他者である植民地の臣民がこの定義から外れたのはもとより、帝国の領土内に居住する農民や都市低所得層に属する人々も、内なる他者として排除の対象とされたのである。

「無学」の母親たちが帝国の問題として取り上げられる一方、都市ブルジョワ層の女性が称揚され、帝国の未来を保障するよき国民を育成せしめる「正しい母」の唯一正しいモデルとして普及した。この植民地主義的言説を受け、エジプトにおいてもよき国民の創出はナショナリストの緊急課題とされ、その成否を女性に担わせる議論が盛んに行われた。よき国民を生み出すのは母であり、そのためには母を教育する必要がある、というのが当時



広く普及した議論である。しかし植民地という文脈では、この言説は両刃の剣として機能する。宗主国と同様に国家の進歩のために「正しい母」のあり方が重要であると議論されたのと同時に、この言説を受け入れることは、エジプト人女性と西欧女性の差異をもって、国家としての能力における差異を認めることをもまた要請したのである。

一方、女性には「国家の母」として文化の全一性および真正性を表象するという役割も付与された。これが、シャクリーの指摘する二つ目の役割である。近代化を推進することで国家としての地位を固めようとしていたナショナリストたちは、自らの事業が単なる西洋の模倣にすぎないという批判をかわすために、女性を「文化の領域」(チャテルジー [Chatterjee, Partha. 1993. *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.] のいうところの内なる領域) に据え、現地の女性をとりまく状況と西欧女性を取り巻く状況との差異を文化的な差異として本質化させる必要があったのである。

こうして、健全なる国民を育てる母であれ、国家の真正性を担保する存在としてであれ、エジプトにおける女性は改革の対象として捉えられることとなった。シャクリーはそこでさらに議論をすすめて、育児をめぐる女性のあり方こそ、ナショナリストとイスラーム主義者との議論をつなぐ論点であったと主張する。当時のイスラーム主義者の出版物を見る限り、当時普及していたイスラーム主義的言説にとっても、育児をする存在としての女性は重大な関心事となっており、様々な議論が尽くされたというのである。植民地主義言説を内面化したリベラルなナショナリストと異なり、彼らは国民国家としてのエジプトの独立を急務としていたわけではない。しかしムスリム国家の繁栄に反植民地主義に根ざした社会改革がなくてはならないものとされたとき、イスラーム主義者の議論においてもリベラルなナショナリスト同様、育児こそがその中心的な課題であるとされたのである。

シャクリーの論稿の中心に据えられているのは、植民地統治下のエジプトにおける育児や女性を扱うナショナリストおよびイスラーム主義言説の分析であるが、そこで浮かび上がってくるのは、国家という文脈において、「女性」が育児との関係のなかで規定されていくさまである。育児や母役割といったものは政治的意図をもった重要な国家プロジェクトという側面を擁すというだけでなく、まさにその育児や母というものの議論から女性が論じられてきた、というわけである。植民地帝国主義が援用する優生学的文献からエジプトにおけるイスラーム主義者の出版物までを幅広く対象とするシャクリーの手法は、こうした主張を詳細に論証することを可能にしている。確かに、こうした議論がエジプト社会全体にどの程度の影響力をもっていたのか、という点をこの論稿からうかがうことは難しい。さらに言えば、当時の識字に関する状況や出版物の普及という観点から見れば、こうした議論に参入できたのはほんの一握りの限られた人々であったことは容易に推測できる。しかしながらその後の学校教育や憲法制定においてもこうした議論が周到されたはずであることを考えれば、シャクリーの考察において明らかにされた、国家と育児との関係をその中核とするエジプトの女性観は、時間を経てより一層社会に広く深く浸透しているはずであると考えることにもまた妥当性が見出されるであろう。

よき国民を育てる母として議論され発展された女性像。果たしてこれはエジプトのみ、もしくは中東世界に固有な現象であろうか。シャクリーが用いた資料はエジプト国内の議論および宗主国であった当事の西欧諸国のものに限定されている。しかし私たち自身をとりまく社会における育児と女性との関係を翻ってみるとどうであろう。女性に付与された育児



という役割を考えると、個人という大きさを越えた力を感じた体験をもつことはめずらしいものであろうか。育児という一見私的な行為であれ、それはすでに国家の介入の範疇とされ、国家が統率すべき最たるものとして構築された歴史をもつこと。シャクリーの論稿は、育児を論じるとき国家がすでに無視できない存在であることを雄弁に主張するのである。